

「雨ニモマケズ」を読む

龍, 佳花
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/12024>

出版情報 : 語文研究. 56, pp.15-20, 1983-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



「雨ニモマケズ」を読む

龍
佳
花

「雨ニモマケズ」は不思議な詩だ。次にそれを掲げる。(引用・呼称等は筑摩書房『校本宮澤賢治全集』による)

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ曠ラス

イツモシツカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

私はこれを賢治の代表作とするのを好まないが、そうしたくなるのはわかるように思う。ここには賢治がいる。気の早い人がこの一篇を讀了しただけで、わが賢治を語りたくなるほどに、過不足なく見通せる位置に賢治がいる。それは忘れ難い肖像画のようだ。この、言いたい内容を持つ人なら誰でも書けそうな、またその内容とやらもどこかで聞いた風な、そんな体裁の詩に、いったいどんな表情を讀みとって宮沢賢治の名を冠せずにおれないか、私は不思議に思う。こうした疑問にこだわりながら「雨ニモマケズ」を讀んでみようと思う。

まず、この詩が他人の手で一人前にされてしまった特殊事情を避けるため、母胎である「雨ニモマケズ手帳」（以下「手帳」と略す）にこの詩をもどして読むことから始める。

賢治晩年の死の床で用いられたこの「手帳」は自戒や法華経典の文句等の記入が大半を占める。とは言えそれまでの破棄・残存を含めおびただしい量にのぼるであろう、備忘も兼ねた創作用手帳の性格を失っているわけではない。一応詩篇とみなすことのできる記入が十六篇ある。そのうち六篇が後日下書稿として用いられている。これらはすべて文語詩で「手帳」の後半部に寄っている。自由詩には「この夜半おどろきさめ」で始まるもの、「くらかけ山の雪友一人なく」で始まる中断詩篇、「月天子」と題されたもの、そして「雨ニモマケズ」で始まるもの、計四篇があるが「手帳」に記されただけで終わっている。あと旧作の口語詩の回想・推敲らしい断片二篇、文語詩四篇がある。

これらの中で「雨ニモマケズ」は折念風の調子を持つことと片仮名書きである点で異質な感じを与え、よほど他の自戒の記述に似て

いる。明らかに詩の形で書かれ表現は終結しているが、平板に流れるリズムが初心者的で、「春と修羅」の詩人というには不安を感じさせる。詩的メモという呼び方もある。が、あえてメモ扱いせずとも「ヒドリ」と誤記したまま推敲の跡もなく放置されたこの口語詩は、他頁の三篇の口語詩と同様の扱いを作者によって受けただけなのかもしれない。即ち「病氣からこっちは殆ど短い文語の定型ものばかりで」（昭和八年五月十六日森佐一宛書簡）という作者の創作意識によって当然受けた扱いと考えられないか。これもよく知られる昭和三年又は六年の発病後と推定されるメモに「病中記 全部文語とすること 清書のつもりにて書くこと 修飾せざること」（「NOTE印手帳」）がある。病床にあつてなお、と言うより、肉体の働きの死に向かう時に増大する何物かのエネルギーによって新たな創作分野に向かう賢治の詩精神は、私には届かぬ彼方にある。書くことが賢治には生きる意志そのものだったと言えるところがある。小倉豊文氏は「賢治にとって、あれは、詩ではない」（洋々社「宮沢賢治」昭和五六年三月号所収「ドとデ」）と言われたが、「雨ニモマケズ」が作者の歯牙にかかっていないのは明らかとしても、この時期の賢治の創作活動自体がまだまだ不明であり、また「これらはみんな到底詩ではありません」（大正十四年二月九日森佐一宛書簡）と、いわば生涯言い続けた賢治の詩を讀む者として、私には、こういう詩も可能だ、との思いがある。更にそこから臆測を広げて、奇跡的に健康を得た賢治が「手帳」のメモを、例えば壮大な叙事詩の構想の核に用いるといった可能性を考えてみるのだが。「手帳」時代の賢治の詩意識は、時代をもっと延長

した線上からも扱えられねばならないと思う。

さて「雨ニモマケズ」はありきたりの語を連ねている。しかしこれを「手帳」の中に置いてみると驚く。ここには宗教の言葉がない。「手帳」の用語から言うところには特筆してよい。用語上宗教臭がまったくないのは、詩では「雨ニモマケズ」と「くらかけ山の雪」だけ（旧作回想詩を除く）と言ってよく、ほかは古歌・園芸メモの類にすぎない。この詩がたやすく読まれてしまうことへの反動もあるが、日常生活用語のみによる表現は、この「手帳」を地にすると、用語の選択という積極的な意味を帯びて見える。「雨ニモマケズ」はもともと「手帳」から独立しやうい性質を持っていたと言えるだろう。あとは読者が自分の方に引き寄せただけだった。

そうした語で作者が形成するのは概念を要せぬ単純な生活思想だ。わずか二文、呼吸でならせいせい十呼吸で済む。「雨ニモマケズ」と最初の一行を書きだすと言い足りぬ感があつて「風ニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ」と説明して、これで今最も切実な健康への希願を述べたから、次に日頃念頭を去らねまことの精神のあり方に思いを移す。「慾ハナク／決シテ瞑ラズ／イツモシツカニワラツテキル」——ここで文が止まる。実際この詩の内容はこれで言い尽くされている。しかし「シツカニワラツテキル」と描いた時既に浮かぶイメージをとどめることができない。ゆっくりと、だが一続きに、食べ住み行為する人の姿を形造る。この仕事は今書きつけた一行が次の一行を生み出していくような、無造作だがあともどりのきかない（する気のない）刻み方で進む。構成は自ずと、前の一文が動きのない全体像、後の一文が実際生活像となった。そして最後を

「サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」と心中深く収めた時、作者は心をこめた礼拝を終えた人のように深々と息をついたろう。その時この詩は十分祈禱文の働きをしている。

しかしデクノボーとは何か。東西南北で、早害と冷害で、ワタシがとる行動は判明するが、それらを合計しても「デクノボー」であることにはならない。この語はそれまでの具体的な行動を包んで抽象化し、そのためあいまいさと共に強い印象を与えている。「デクノボー精神」という一語で「雨ニモマケズ」の内容が代表される事態が起こったのは当然だったろう。デクノボーという語の不明確さが、「雨ニモマケズ」を難解にできたと言つてよい。しかもこの詩の文脈をたどつてデクノボーを理解する方法は成功し難いと思われる。この詩に並んだ実行目標の数々に私達は思考の習慣上、作者の伝記的事実を重ねてしまうからだ。それは結局見解の相違以上のものをもたらさない。「ツマラナイカラヤメロトイヒ」「ヒデリノトキハナミダヲナガシ」「サムサノナツハオロオロアルキ」という行動は政治的には敗退だろうが、ここに一人の転向者を見出すか否かは多く読者の人生観に依るだろう。それにしても「雨ニモマケズ」は賢治の生涯の引き幕ではない。どうして過去の総決算をデクノボーに求めようとするか。「雨ニモマケズ」を読むために読者はひとまずこの詩を離れて、デクノボーそのものの詮索に向かう必要がある。

これについては多く論及があるように「気のいい火山弾」のペゴ石や「虔十公園林」の虔十、「オッベルと象」の白象のような、無私の心を持ちそれを意識すらしていない、無能とも見える生活者たちにつながる存在として、「ホメラレモセズクニモサレズ」という

デクノボーがある。が、ここではデクノボーと呼ばれる者の来歴を検討することはせず、そこに一貫すると思われる精神のみ考えに入れる。

デクノボーの「現在」に迫ろうと努める時忘れられないのは「手帳」のこの詩のあとに第十一景からなる戯曲メモ「土偶坊」と、更にそのあとに文語詩「不輕菩薩」があることだ。次に「土偶坊」からの抜き書きと「不輕菩薩」の第一稿を掲げる。(「手帳」にこの詩の第二稿があり、またそれらを用いた作品「不輕菩薩」が「文語詩未定稿」の中にあるが、内容は大差ない。)

土偶坊

ワレワレカファイフモノニナリタイ
第三景 青年ラ ワラフ

土偶坊 石ヲ投ゲラレテ遁ゲル
第五景 ヒデリ

第十景 帰依者 帰依ノ女

不輕菩薩

あるひは瓦石さてはまた

刀杖もって追れども

見よその四衆に具はれる

仏性なべて拜をなす

不輕菩薩は「法華経常不輕菩薩品第二十」に説かれる。釈尊の過去世の修行の姿と言う。「土偶坊」は不輕菩薩の始終をモデルとし、「不輕菩薩」は法性礼拝という修行の眼目を焦点とするという、戯

曲と詩との方法上の違いはあるが、両者共、四衆の耳に逆らって法を説くのは万象に成仏の因である法性(法界)の存在を認めるからだ。この法界の实在とそれに基づく実践に、作者の創作意図がある。ところでこの法界の实在は賢治も使用するところの「法界成仏」「十界成仏」という法理の根本理論となるもので、実践的な方向からこれを言いかえると苦即楽、沙婆即寂光、現実そのままでの楽土現出といったものになる。これは「手帳」では、病床を格好の道場としてもろびとの苦を苦しむ、病床そのままで仏国土を現するという、病者としての深刻な実践の形で賢治に意識されている。自己を支える理論と実践を提供するものとして、この時期の賢治は不輕菩薩の行道にモチーフとしての関心を越えるなみなみならぬ関心を抱いたと思われる。「法界ヲ礼拝スルナリ 住忍辱地」との「手帳」メモは同じ事情を示している。

このような現実変革思想は「雨ニモマケズ」にも共通している。この詩は未来の理想を描いたように通常受けとられるが、実はデクノボーの住処もまた「ヒデリ」「サムサノナツ」の現実の岩手である。不輕菩薩と同じく忍辱の心を要する世界であってユートピアではない。その上でデクノボーは、相手が誰であろうとこちらをどう思っていようと無差別に関わっていく。それは自分を含めて全ての人に展かるべき法性があるという信念に基いている。そんなやり方で何を変えることができるのか、パン一つでもふやせるかという問いに、デクノボーは沈黙して不輕菩薩を指すだろう。

しかしここで両者の様相がかなり異なるのに気付く。一つはデクノボーが迫害を受けていないことだ。現実世界の、善に対するに悪を以てする無明・上慢の四衆は「雨ニモマケズ」に現れない。デク

ノボーは「ホメラレモセズクニモサレズ」相手にする価値もないと見過ごされている。この点ではデクノボーはまっすぐにあの虔十たちにつながつている。

更にデクノボーには、以上の不軽・土偶坊・虔十たちとも決定的に異なる面がある。「アヲユルコトヲ／ジブンヲカンジヨウニ入レズニ／ヨクミキシワカリ／ソシテワスレズ」という知性の高さだ。經典を読まず専ら札奉行に徹した不軽菩薩と、農村で布教するらしい土偶坊とが優れた学僧である可能性はある。が、デクノボーは我見・偏見を去った情報収集と理解と記憶とでもいった次第だから、人間わざではない。デクノボーは叡智に至っているのでかえって無知無能のため神に近い人々と一致する。こうしたデクノボーが、死期を迎えた人に「行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」とするのは諦観などではない。生死観の確立（信仰の完成）によるのだ。

これら迫害の有無、智の有無を賢治が自覚・区別の上描いたとは無論思えない。「雨ニモマケズ」自体が不用意に書き始められた。デクノボーという語は自分への他人の評価を示す以上の意味あいもなく「雨ニモマケズ」のあの箇所位置された。だからこそこの詩の読者は多く「デクノボートヨバレ」の行でつまずくことなく読み終えこどもも感想を持つ。しかしふとこぼれたからこそ、この差違を非常に大きなものと私は思う。なぜなら賢治が「雨ニモマケズ」を「サウイフモノニワタシハナリタイ」と書き終え、それから数日後、前に使ったデクノボーの語に着想を得て（と私は思う）土偶坊なる主人公を創作した時に、題の脇に「ワレワレカフイフモノニナリタイ」と付した、そのワタシとワレワレとのへだたりが、この差

違となつて現れた、と思われるからである。

つまり私は次のように考える。不軽菩薩と土偶坊には、賢治が実際に下根子桜で中傷された経験も含めて、そのような社会に生きるワレワレの有智無智を問わずありうべき姿が思い描かれている。それは孤立無援に耐える求道者の姿だ。ワレワレの一人としての立場から賢治にも「くらかけ山の雪友一人なく」との実感があつた。或いはまた「われに衆怨ごとくなきときこれを怨敵悉退散といふ」（「手帳」）等の胸中での戦いがあつた。しかし「雨ニモマケズ」は違つ。苦しみも瞑りも過去の闇に溶けたワタシだけの理想だ。ワタシは頼りにする友も格別の愛を注ぐ家族も求めない。たった一人、静かで美しい時間の中にいる。「雨ニモマケズ」のデクノボーは賢治だけの顔を見せている。

ではデクノボーは何者だと言うのか。小中学生にそう発問したと想定するまでもなく、ごく常識的な見解は、ここに一人の偉大な農夫を見出してきた。これはルバーシカを着て畑を耕すトルストイを農夫と呼ぶのと同じ誤解だ。トルストイを誤解する以前に農夫を誤解している。果たして万人への愛を持つとうとする無欲な農夫は、理想が昂じて家族の労働生産すら無視するものか考えてみるといい。また普遍的な人間の理想が描かれているという見解もある。が、それは信じ難い。細かく言えば「雨ニモマケズ」の一文目は万人向けの理想だが、賢治自身が表れた二文目のデクノボーを、自分の理想として共鳴した人が本当にいたのだらうか。自己を滅却しているかに見えるデクノボーを。彼等はこのような人が存在するという事実で感動すると混同しているのではないか。この詩のデクノボーについて最も的を得た解答は、ワタシは何者でもない、というものだ

ろう。この詩は読者の前に幾つもの生活の相を並べながら、逆に何の職業もどんな隣人も思い浮かばせない。これらの生活様式をとらせているデクノボーの精神に目を凝らさぬ限りは。

叔智の人デクノボーはまったく当然に詩人だ。職業詩人でないだけだ。最低の食料を自分の手で産出してゐる。政治上経済上の無能者で、近代人の笑い者だ。しかしこのデクノボーは涙を流しおろる歩く肉体の内部で言語を創造してゐる。科学の力で現実に向かう任務を、もっとふさわしい人にゆだねてしまつてゐるだけだ。創造の夜詩人はまことの言葉の力を信じ新たな世界を生み出す仕事に苦悩する。それが詩人の現実だ。「雨ニモマケズ」が祈りになつたのは、真底信じる言葉を持つ者に思想と祈りは殆ど同義だからだ。

「イツモシツカニワラツテキル」はずのデクノボーが、時に「コハガラナクテモイ」、「ツマラナイカラヤメロ」と語るのを、私は軽く読み過ぐることができない。これは気安めのセリフではない。

詩人は、言語の力を信じてゐるのだ。これが無力に見えるのは、ただ人々が長生きや訴訟の勝利の方を信じたいからなのだ。こうしてデクノボーはかけずりまわる。博愛精神によつて、とするのは当たらない。この詩人の知性は生ける者の苦しみに同苦することで世界を理解するのだ。そういう個性的理解からしか個性的表現は生まれない。賢治にとっては苦痛を避ければ創造もなかつた。これは賢治の持論だつた。たとえばこう言つた。「詩人は苦痛をも享楽する」「なべての悩みをたきぎと燃やし、なべての心を心とせよ」（「農民

芸術概論綱要」）

こうして「雨ニモマケズ」に宮沢賢治という詩人の魂を認める時、私達は、たとえば「手帳」の仏教用語で固めた次のような創作

論から、有名な創作メモ「詩は裸身にて理論の至り得ぬ、境を探り来る、そのこと決死のわざなり（後半略）」と同じ、詩人の叫びを聞くだろう。——「断ジテ、教化ノ考タルベカラズノ、タゞ、純真ニ法案スベシ。タノム所オノレガ小才ニ非レ。タゞ、諸仏菩薩ノ冥助ニヨレ。」（なお先にあげた創作メモは「文語詩未定稿」黒クローズ表紙〔B〕のC面にある。没後発見された。）

「雨ニモマケズ」が現実からの逃避に見えるのは、一見穏やかなこの詩に詩人の苦悩を見落すからだ。デクノボーは敗退どころか、詩人の宿命を背負うのである。しかし賢治にとつてそういう自分のあり方はごく当たり前のことで書くまでもなかつた。そこで、最も私的な「雨ニモマケズ」が最も普遍的な賢治を表現する結果になつた。私にはこの詩は、使命達成を願う飽くなき表現者の宣言と思われる。

このような賢治が「高知尾氏ノ契メニヨリ」と、感謝をこめるように名を挙げて「法華文学ノ創作」と『手帳』に記したのは、この時期の賢治の心境を総括して余りある。ある宗教運動への参加に置いていた自分の使命を、そうではなくて自分がまことの言葉を実現する表現者であることがまことの信仰であると自覚したのは、十年ばかり前のその人との対話であつたから。その辛い天来の使命を完うする場所を、岩手へ桜へと定めていつた過程の最後がたまたま病床であつた。